

## REMARKS ON BLUE

日本には青をめぐる伝統色が数多く存在する。  
藍染めや有田焼、江戸切子といった伝統工芸や技法があり、  
印刷にはシアンという基本色がある。  
100段階の青の曼荼羅というかたちによって、  
青の強さとその奥深い世界を探った。

# 野老 朝雄

ASAO TOKOLO

Printing Director : 須江 啓一

## ABOUT TRIAL

トライアルについて

### ■歴史の足跡をたどることから始まった青との出会い

僕が青という色を追いかけるようになったのは2015年のことでした。展覧会の仕事で頻りに足を運んでいた青森で、津軽の伝統的な刺繍技法の「こぎん刺し」に出会いました。藍染めの布に白い木綿糸で整然と刺繍されたパターンに大きな感銘を受けた僕は、そこから青という色に一気にのめり込んでいきました。

青には様々な種類があり、紺、藍、群青のようにいろいろな名前があります。藍染めにも有田焼にも古い歴史があります。徳島の藍染めの染料である蓼(すくも)は北前船で伝わり、青森に藍染め文化が広がりました。藍というパトンのつないだ歴史がそこにありました。

### ■藍染めから有田焼へ、そして印刷へ

作品では藍色の濃度をグリッドで組み立てたものを軸にしています。いちばん薄い藍色を1、濃い藍色を100としてそれを割った100段階の藍色が曼荼羅状に絡み合っかたちをなしています。

この100段階の青のスタディは藍染めが最初でした。藍染めでは色をつくることを「建て」といいます。特に徳島では伝統的な「地獄建て」という手法があり、この名前からも藍染めの技法が非常に大変で苦労するものであるということがうかがえます。

次に挑戦したのが有田焼でした。千数百度の温度を微妙に調節しながら焼く工程は感動的でした。

こうした経験を積みながら、僕の頭のどこかには「印刷ではどうなのかな」という興味がありました。普段、僕はインクジェットプリンターを使用している



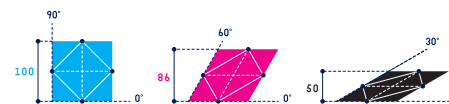
ので、オフセット印刷ではどうなるのか、いつかアプローチしてみたいと考えていました。

### ■個と群、律を色に展開する

軸になっている青はC100%、M86%、Y0%、K50%の掛け合わせになっています。「この数字は何?」と思う方も多いでしょうが、実はこの数値は自分にとっても大きな意味のある数値で、僕の創作活動の軸、紋様と深い関わりがあります。

創作で重きを置いているのが「個と群」であり、「律」という考え方です。律は「縛り」です。サッカーなら手を使わない、俳句なら五・七・五で詠むのと同じです。こうした縛りは美しさへとつながり、共有性と多様性を合わせ持つ物語が生まれます。

今回の色の数値には、菱形の面積比を使用しました。正方形を100とすると、60°の菱形は $\sqrt{3}$ (86.603)、30°は50になり、これをCMYKに当てはめると伝統的な藍色になります。なんとも不思議な発見でした。



# TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

## 同じデータを条件の違いだけで 様々な色と表情を創出する

野老 朝雄 × 須江 啓一 (PD)

### ■青の強さをトライアルで探る

トライアルでは、裏テーマとでもいべきもう一つの軸がありました。物理的な「青の強さ」です。

子どもの頃に画集で見た葛飾北斎の『富嶽三十六景』(神奈川沖浪裏)は青の印象が強烈でした。江戸の化政期の日本橋を描いた絵巻『熙代勝覧』では見渡す限りの街並みに藍染めの暖簾がかかり、人々は皆藍色の着物や法被を着ています。青は人々の暮らしにずっと寄り添っている色だと感じました。

その背景には青の強さがあるように思えます。剣道の装具の裏打ち布は藍染めですし、武将の甲冑のパーツをつなぐ紐「威毛<sup>おとしげ</sup>」にも藍が多く用いられています。藍は武将の色、侍の色ともいわれ、「勝ち色」という名の青も日本の伝統色に存在しています。

何より青は黒とともに、時間を経ても最後まで残

る色のようです。僕が見た北斎も古かったからきっと黄色が褪色して、余計に青が鮮烈だったように思えますし、街頭で風雨にさらされたポスターが青1色になっているのも青の強さの証明のように思えます。青の強さを実際にこの目で確認してみることも大きな目的になりました。

### ■日本の「青の強さ」を後世に伝えるために

先達の芸術家は作品や生き方で「ものの見方」を、研究者は技術や知識、考え方を後世に引き継いでくれました。皆、時代を超えたバトンです。

そして僕は藍染め、有田焼に続いて「青の強さ」を伝える作品をつくりました。物理的な強さとともに、青という懐の深い色としての強さも込めたこの作品が後世にバトンをつないでくれることを願っています。

### なぜ青色は強いのか

#### ●分子構造が変化すると褪色が起きる

インキや絵具の色の素は、顔料と呼ばれる色を帯びた粉末で、分子構造によって色を発現させています。この分子構造が光のエネルギーなどによって変化すると発色性が失われ、色は消えてしまいます。これが「褪色」という現象です。

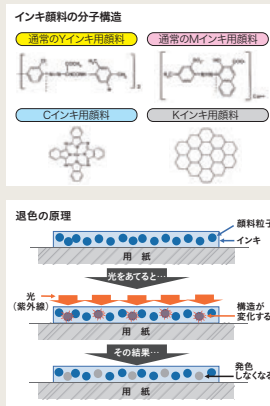
#### ●青と黒の顔料は構造的に褪色しにくい

褪色は、どんな色でも同様に起きるわけではありません。長期間、屋外に貼られたポスターを見るとわかるように、色はその分子構造がどのくらい強いかによって褪色するスピードが変わります。プロセス4色の場合、CやKの顔料は構造自体が強固であり褪色しにくく、一般的なMやYの顔料は分子構造に結合が切れやすい部分があるので比較的速く褪色します。

#### ●青には耐性インキが存在しない

褪色を防ぐために開発された「耐性インキ」と呼ばれるインキがありますが、これには青や黒のインキは存在しません。青や黒の顔料には、「耐性インキ」の赤系・黄系と同程度以上の耐光性があるからです。耐性インキをつくる必要がないほど、青や黒のインキは元々「強いインキ」だったのでした。

(取材協力：東洋インキ)



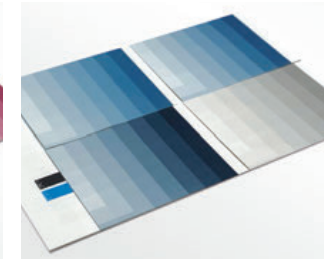
### 時間による色の変化(経年変化) (用紙:オーロラコート)



印刷後の通常の状態



直射日光に72時間あてた状態  
Y(イエロー)版の色味が消えた。



直射日光に360時間あてた状態  
M(マゼンタ)版の色味が消えた。

### 刷り順による色の変化(用紙:NTラシャ 漆黒)

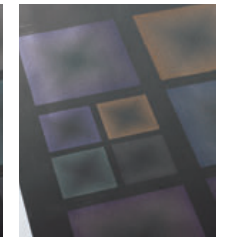
用紙の質感やインキののり具合によって色調は様々に変化する。そこで各種用紙で同じ入稿データを刷った場合にどのような変化が起こるかを検証した。その結果、黒のように濃い色の用紙では、インキ色に紙色が影響して想定外に発色することを発見。さらに刷り順を変えて刷ってみたところ、先に刷ったインキが紙色を隠蔽し、後に刷ったインキの色調が強く残ることがわかった。



入稿データ



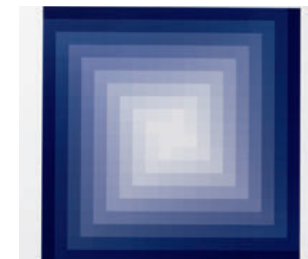
通常の刷り順(K→C→M→Y)  
M版が上になるため全体的に赤味を帯びる。



変則的な刷り順(K→Y→M→C)  
C版が上になるため全体的に青味を帯びる。

### 見せ方による色の変化(用紙:アリンダ)

透明な素材に印刷した刷りの、重ね方による色の変化を検証した。その結果、重ねる枚数やその間隔によって色や表情が変化することを確認できた。色の変化は、用紙が透明とはいえ若干の色味を帯びており、重ねるほど透過率も変わるためだと思われる。また、用紙間に隙間をあげると若干のバースがかかって見え、微妙なズレが生じる。そのためモアレが発生することも確認できた。



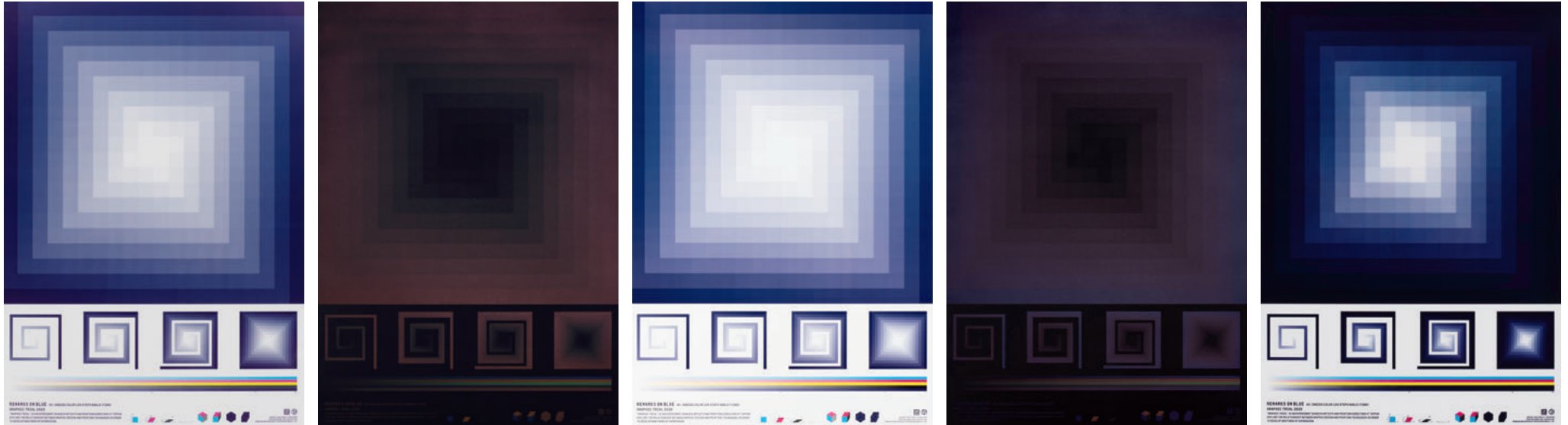
1枚のみの見え方  
すっきりときれいに発色している。



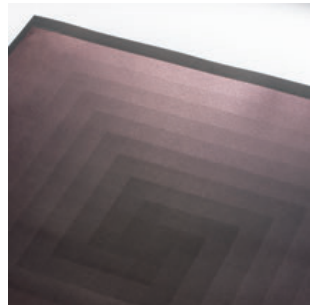
3枚を密着させて重ねる  
色に深みと濃さが増し、全体に藍色を帯びる。

# FINISH

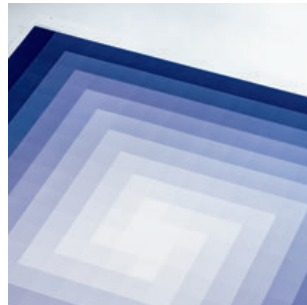
全作品とディテール



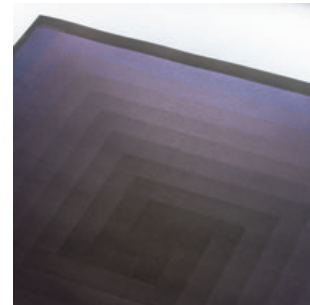
1



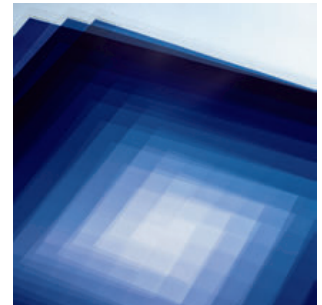
2



3



4



5

- 1\_オフセット印刷4色 (K→C→M→Y) 用紙：アリンダ (OFT-N100) ※CMYKの分色版4枚を重ねて展示
- 2\_オフセット印刷4色 (K→C→M→Y) 用紙：NTラシャ (漆黒)
- 3\_オフセット印刷4色 (K→C→M→Y) 用紙：ヴァンヌーボスムス-FS (スノーホワイト) ※見る時期によって色が変化する
- 4\_オフセット印刷4色 (K→Y→M→C) 用紙：NTラシャ (漆黒)
- 5\_オフセット印刷4色 (K→C→M→Y) 用紙：アリンダ (OFT-N100) ※4色刷り3枚を重ねて展示